

1 久路川ひさじがわのほとり。

静で穏やかな川の流れ……。川幅は、さして広くはない。堤の向こうに、幾本もの炊かしきの煙がたちのぼり、辺りは淡紅色に包まれている。この町の静謐な暮らしが漂う夕暮れのひととき。

川面をじつと見つめる、おおだな大店の娘と番頭の姿がある。

「あつ、また跳ねた！」

娘が、頓狂な声を張り上げ両手を広げる。

色白で美形ではあるが、どこかおっとりとしている。大店『加賀屋』の末娘——琴（十六歳）。

番頭も両手を広げている。

「ほう、今のはこれくらいはありましたね」

と、番頭、広げた両手を琴の広げた両手と見比べる。『加賀屋の二番番頭——清七（十九歳）。目鼻だちのきりつとした美男である。

二人は、また、じつと川を見つめる。

琴 「あつ！」

二人、また、両手を広げる。

琴 「これぐらいは……」

清七 「はい、ありました」

どうやら二人は、跳ねた魚の大きさを見比べ、確かめ合っているようだ。また、川を見つめる、二人。

魚が、跳ねる。

二人「あつ！（大きく、両手を広げる）」

二人「あつ！（中くらいに、両手を広げる）」

二人「あつ！（小さく、両手を広げる）」

二人「あつ！（極小。指を小さく広げる）」

清七 「今のは、たせ鯛ですね」

琴、ふと川上に視線を移し、糸を垂れている四十搦がらみの釣り人に眼をとめ、

「……清七」

清七 「はい」

琴 「お前は釣りはやらぬのですか」

清七 「釣りはトンと、川で楽しそうに遊んでいる魚を、針で釣り上げるなど……」

琴 「ザン・コク」

清七「きつぱりと」はい」

琴「（微笑んで）お前は、優しいのねー」

清七、大いに照れる。

琴「……こうして、この久路川を眺めていられるのも、あと半月」

清七「えっ、あと半月?! ……時の流れというものは早いものです

ね……お嬢さまの花嫁姿、お美しいでしょうね。金欄緞子の帯しめながら、花嫁御寮は何故……。泣きますか？」

琴、首を傾げる。

清七「泣いたほうがいいですよ。馬ですか、駕籠ですか……。そう、

馬のほうがいいなあ……。馬に揺られてお顔は俯きかげん。あまり下むかないほうがいいですよ、嫌々嫁に行くみたいですからね。かといって、上むき過ぎると、屋根やの見習いみたいですからね。高からず低からず、そう……。このぐらいがいいですね。

（と、やってみる）この角度で馬に揺られると、首がこう動いて……。いいわあ。私も、あの姿を見ると、女に生まれたかったなんて思うんですよ。いいわあ、首がこう揺れて馬の足音がポックリポックリ、首がこうで、馬がポックリ、時々馬の蹄が小じやりを踏んで、チャリチャリ……。いいわあ————ッ」

琴「お前、私の代わりにお嫁に行ったら」

清七「（思わず）ええっ、いいんですか!!」

呆れる、琴。

清七、話をそらし、

「お嬢さま、今日の踊りの手、あれ難しかったですね、こうでしたっけ……」

琴「（淋しそうに）清七」

清七「……そうして、清七と呼んでくださるのも……。 （感極まり）

お嬢さま！」

琴「清七ッ……」

清七「は——いッ」

琴「……私は、この久路川が好きです」

清七、川を恨めしそうに睨み、

「（ウイスパーで）……川が羨ましい、久路川の馬鹿！」

琴「……この川は子供の頃からの思い出がいっぱい、楽しかったわあ」

清七、急に好色な目付きになり、辺りをキョロキョロと伺う。

と、釣り人と目が合う。

清七の眼が釣り人を威圧する。

釣り人、弱々しく眼をそらす。

清七「お嬢さま、もう一つ……私と、大人の思い出を作りませんか」  
琴、川面に見入っている。

清七「……聞いてねえや」

琴「(唐突に) 私が、三つのとき……」

清七「(つられて) 私が五つ」

琴「お祖父様に連れられて……」

清七「知ってますよ、そのお話」

琴「あら、そう」

清七「奥様から、もう何度と……。兎に角、お茶のたんびに……。

『雨上がりに、釣り好きの大旦那さまが、お嬢さまをお抱えになられたまま、この土手を降りようとなされ、おみ足をお滑らしになられ、お転びなされて、泥だらけになられた』と、ここまでお話をしてお茶を啜って、私の顔を見つめて『ワツハツハー』……。何故、私の顔を見て笑うんですかね……。二枚目の声で、自分の顔を鏡に写すような仕草をして) とんと笑える顔でもなし」

琴「……? とところが、それからが大変、帰ろうにも泥だらけのお祖父様は人目があって、私に家の者を迎えにやらしたの」

清七「よくお帰りになりましたね、三つで」

琴「帰れなかったわ、迷子。お母様、お話しなさらなかった」

清七「いいえ、いつも『大旦那様が土手から滑って泥だらけ……』で、お茶を啜って、じっと私を見つめてワツハツハー。で、おしまい。で……」

琴「で、家の者が帰りが遅いと、(講談調) 大番頭、番頭、手代、丁稚までが、手に手に提灯を下げ『(いろいろな声色で) 大旦那様あー、琴さまあー、大旦那様あー、琴さまあー』と」

清七「ボン、ポポンのボン。今のは、お米に、お寅に、五作に、兵吉ひょうきちでしょう」

琴「当たり前!」

清七、当たった褒美と手を出す。琴、その手をピシアリと叩く。

清七「……憶えているんですか、三つで」

琴「お母様から聞いたのよ。お祖父様は、川原で夜鷹の焚火に当たっていたそうよ、ぶるぶる震えて……。私は、ここから半里も先の魚屋さんの腕のなかで泣き疲れて眠ってたんだって。その魚屋さんが、与吉さん」

清七「与吉さんって……登与とよさまの」

琴「そう、お姉さまの別れた旦那さま」

清七「へーっ」

また、魚が跳ねる。二人、無意識に両手を広げる。

清七「大旦那様は、焚火に当たっていただけなんですか、ぶるぶる震えて」

琴「ええ」

清七「忙しげに指を折って）六十四ならまだまだ、夜鷹でも買っておれば寒さの震えなど治まっておりますものを……、ね」と、いやらし視線を琴に向ける。

琴「ヨ・タ・カ・つて何ですか」

清七「えっ」

琴「ヨ・タ・カ」

清七「知らないで？」

琴、コクリと頷く。

清七、また急に好色な目付きになり、辺りを伺う。

と、また釣り人と眼が合う。威圧する、清七の眼。

そして、琴にいやらしく耳打ち。

琴「（あっさり）と）何だ、お女郎さん」

清七「（知っていたのかと、がっかりして）なーんだ」

琴「清七！」

清七「はい？」

琴「お前、大前屋の雪さんどうするのですか」

清七「（狼狽えて）ええっ」

琴「夕べも、二の蔵の陰で泣いてましたよ。女を泣かすくらいなら、お給金で、お女郎さんでもお買いなさい。お女郎さんを買うお金を惜しんで、お雪さんが可哀想です。ザン・コクです」

その時、釣り人が、

「あっ!!」

と、大声を上げて驚き、転げる。

清七も、何かと、川面に眼をやり、

「あっ!!」

と、退け反る。

琴「清七、どうしたのです!？」

清七「お嬢さま、見てはいけません、見ては……」

琴「何ですか？」

清七「見てはいけません、血の付いた人の腕です」

琴「キヤーッ!! 見てはいけないものをどうして説明するの」

清七「あれはきつと、司山つかさやまの山賊に殺された旅人の腕です」

琴「……山賊？」

清七「はい!。(急に、観光案内のような喋りになり)この久路川の源は司山で、そこへ旅人が『(急に、芝居がかかる・老人)あ

あ喉が乾いた、丁度おいしそうな川の流れ、これ一服』と、水

を飲んだその時、こーんなのが現れて(凄い形相)『こら旅人、ただ呑みはダメダメ金を出せ!』ところが、この旅人の方が気が強かったりして(ここから、立板に水の如く喋る)こういう時、気が強いので損ですね。刀持った山賊に向かって行っちゃって、山賊の顔「かーっ」引っ掻いちゃったりして、引っ掻かれりゃ、どんな人の良い山賊さんだって頭にきますからね「シヤリーン」と刀を抜く、それを見た旅人が、自分が気の強いのをすっかり忘れて逃げ出す。それを見て山賊が旅人を追う。相手が弱いと思うと急に強くなる。(客席に向かつて)よくありますね。『助けてー』と、拜むのも聞かずに、今更拜まれたって、山賊さんは、阿弥陀さまでも、観音さまでもありませんからね『アミダ、カンノンならねえ!!』と、背中を袈裟懸に……。あれ、こうやって拜んでて背中を袈裟懸というのは、(客席に)おかしいやね。ま、おかしいけど、兎に角、バサーッ!!と」

琴 「キヤーツ!!」

清七 「肉が裂けて、血がザバーツ!!」

琴 「キヤーツ!!」

清七 「振り向いたところを、脳天幹竹割り、バサーツ!!」

琴 「キヤーツ!!」

清七 「手足を、バサツ!! バサツ!!」

琴 「キヤーツ!!」

清七、血の付いた刀を舐めるしぐさ……。

琴 「キヤーツ!!」

清七 「切り落とした腕を晩飯がわりに、バーリバリ!!」

琴 「キヤーツ!!」

清七 『べっぺっ、ジジイの腕は張りがなくてうまくもなんともねっ』ポイ、ポチャーン。その腕が、ここまで流れて来たのでしよう。ほら、見てくださいお嬢さん、凄いですよー」

琴 「……ばか」

## 2 蔵の中。

初夏の朝の陽ざしが窓から射し込んでいる。

その蔵の一隅で清七の団扇の風を涼しそうに受けている女、登と与よ(二十歳)。気品のある顔だちに妖艶さが漂っている。

清七 「……やはりこの家のなかでは、ここが一番涼しいようですね」

登与 「はい、ここが一番」

清七 「それに、蔵のなかというものは、何と静かなのでしょーう」

登与 「はい、静かです……物音ひとつしません」

清七「……登与さま」

登与「はい……何です？」

清七「……はい」

登与「何です？」

清七、ゆつくりと登与を扇ぎ続ける。

清七「……登与さまは、与吉さまとお別れになられて、もう（指を折る）」

登与「……四年になります。それがどうかしたのですか」

清七「……お寂しくはありませんか？」

登与「……別に」

清七の団扇が止まる。

登与「魚臭い亭主と別れ、かえって清々しております」

清七「……それは、お心は清々としておりましょうが……お身は……お身体は？」

清七の眼がいやらしく動く。

登与「清七、何ですかその眼は……」

清七「〃眼は、口ほどにものを云う〃とか」

登与「（一瞬、清七の眼に吸い込まれる）清七、不謹慎ですよ」

清七「おやつ、登与さまは、私の眼から、何をお感じになられたのですか、何を（と、また、いやらしい眼）」

登与、清七の魔法のような眼に引き込まれ、清七の前に倒れ込むが、

登与「いやっ！」

と、弾かれた身を起こすと居住を正す。

清七「おやつ、私の眼は、随分と表現力があるようですね」

清七の団扇が悩ましく動く。

登与、その団扇に操られるがごとく悶える。

登与「清七、おやめなさい……。清七ったら、いけませんよ。……そんな、あぁッ！」

清七「おやつ、私の上をいつてるようですね。では、これでは……」  
と、清七、一層いやらしく眼を動かす。

登与「あぁっ、もう、馬鹿ッ」

登与、人差指を色っぽく舐めると、床に線を引く。

登与「清七、この線から中に入っては、いけませんよ！」

と、登与、清七に背を向ける。

が、登与の白い足はその線をはるかに侵して清七の前に投げ出される。

清七「おやつ、今、お引きになったその境界線から登与さまのおみ足がくるぶしまで私の方へ、しかも、車海老のように指先を

……」

登与「清七、私に近づくと、舌を噛みますよ」

清七「私が、噛んでさしあげましょう」

登与、沸き立つ欲情を抑えようと袖を噛み、

「ううつ、だあーめーっ！」

清七『「だあーめーっ」じゃ、なさそうですね」

登与「（色気を漂わせ）人呼びますよ」

清七「……呼びたきや、とーに呼んでるでしょ」

登与「セイシチーのバアカアア」

登与、清七に這うようににじり寄り帯揚げを解きはじめる。

その時、階下より、清七を呼ぶ女の声。

登与、愕として咄嗟に解いた帯揚げを襷掛けにし、清七から、  
はたきを受け取るとバタリと倒れ込む。

そこへ、大店の女主人の風格を漂わせ——千代（四十歳）。が、  
現れる。

千代「おお……やはり、ここにいたのですか。おやつ、登与は？」

清七「蔵の中のお掃除を……只今、ご休憩中で」

千代「（大きく頷いて）人の見ている所でしか働かない者の多い昨  
今、登与も出戻って来てから、人のあり方というものが分かっ  
たとみえます。ところで、お前に頼みだけどね、蒔まき邑むらの〃和かずさ  
屋〃さんに行っておくれでないかい」

清七「蒔邑の〃和さ屋〃というば、お嬢さまの婿さまの」

千代「そう、その婿さまのお見舞いに」

清七「お見舞い、ご病気で!？」

千代「二十歳にもなつて、麻疹はしかとは」

清七「死にますかね！」

千代「これ、人事のように、これから加賀屋の親戚になろうという  
お人ですよ。さつ、早く旅支度をおし……」

清七「（きつぱりと）駄目なんで!」

千代「何が、駄目なんだい」

清七「わたしは、まだ、麻疹やってないんで、うつりで  
もしたら、それこそ人事ではなくなりますからね」

千代「やりましたよ、麻疹」

清七「やりませんよ、麻疹」

千代「やりましたよ、お前が貰もらわれてきてすぐ……」

清七の躰が硬直する。

清七「……やりましたか、麻疹。貰もらわれてきてすぐ」

千代「……ごめんね。このことは言わないって約束だったんだよね」

清七「(節を付けた哀れな声で) 何処から貰われてきたか、教えて下さいよ……」

千代「……だから、大旦那さまの遠い親戚ですよ」

清七「(千代に食い付くように) 昔から、そればかりじゃないですか、その後、必ず……」

千代、大声で笑う。

清七「そうやって笑って、奥様、おかしいんじゃないんですか『お前が貰われて来て、ワッハッハ』』『大旦那さまが、泥だらけで、ワッハッハ』』少し調べてもらったほうがいいんじゃないんですか」

千代「何処をです？」

清七「アツチャコツチャ、ドツカですよ」

千代、身体の「アツチャコツチャ、ドツカ」を捜す妙な仕種。

千代「清七！」

と、千代、清七を叱る。

そこへ、旅装姿の琴、現れる。

琴「清七、何をしているの、早く出かけましょう」

清七「あれっ、お嬢さまとご一緒なんで……お供で」

琴「早く！」

清七「はいっ！」

と、言うなり、長持ちの陰から風呂敷を取り出し一瞬にして旅支度を終える。

千代「まあっ!!」

啞然とする千代。

清七「何かありましたらいつでも出て行けるように。さっ、お嬢さま出かけましょう。(風呂敷包を差し) 握り飯も入ってますから、梅干し入りですよ」

琴と清七、出て行く。

千代「(大いに呆れて) まあ、まあ、まあ、まあ、まあ……呆れた」

千代、出て行く。

一人、取り残された登与の眼が、恨めしそうに、琴、清七の影を追う。

苛立たしくばたばたと団扇を使う、登与。

### 3 旅。

カッと、眩しいほどの陽光が降り注ぐ街道を、旅姿の琴、清七が歩いている。

琴……初めての旅。

初めて見る山、初めて見る土地。

二人の楽しい旅が続く。

○

《だんごや》と旗の掛かった茶店。

床几に腰を下ろす、琴、清七。

清七、手を打ち、茶屋の主人を呼ぶ。茶屋の主人、盆に団子

をのせて現れる。

「おやっ？」この主人、いつかの釣り人に何処か似ている……と、気づく、清七。

○

旅は続く。

二人とすれ違う飛脚がいる。

「おやっ？」この飛脚、団子やの主人に、よく似ている……と、気づく、清七。

雷鳴、閃光……夕立が二人を襲う。

二人、辻堂で雨宿り。

清七が琴の濡れた衣服を手拭いで拭いてやる。人目に、仲睦まじい夫婦のように映るふたり。

雨が止む。道に大きな水溜り。

清七に手を取られ水溜まりを飛ぶ、琴。

大名行列が通る。平伏す、二人。

その時、現れた乞食が二人と並んで頭を下げる。

そこへ、通りすがった旅人が、乞食に小銭を投げる。

清七、その小銭をヒョイと懐に入れ立ち去る。

すつくと立ち上がった乞食の視線が二人の行く背を思案げに追う。

その乞食の顔はあの飛脚に……そっくり。

○

渡し船に乗る、二人。

汗を拭う船頭。その顔が、あの乞食に……瓜二つ？ 川面を滑る、船。

船酔いをする、船頭。

清七が艀を替わり、琴が、船頭の背中を擦る。

嘔吐する船頭。

清七、調子に乗り唄い出す。

耳を塞ぐ、琴と船頭。

○

琴、初めてのことばかり……。

そして、

#### 4 初めての男。

暮色の迫る、山中。

琴が、お腹を押さえて苦しんでいる。

清七「どうなさいました、お嬢さま……」

琴「ここが……ここが……」

清七「苦しいのですか、痛いのですか……。困ったなあ、日の暮れないうたに、ここを抜けないと、ここは、(滑舌よく)ツカサヤマ。こーんなのが(と、凄い形相で)現れて」

琴 「うーっ。うっ、うっ」

清七 「えっえっ、何ですか……。分からないな」

清七、風呂敷包から、薬をふた袋出し、  
「いいですか、お嬢さま。苦しいのなら赤い方、痛いのなら黒い方、いいですね、間違えると下痢しますよ。さあ、どっち」と、手品のような手つき。

琴、軀を振るばかりで、答えが出ない。

清七 「お嬢さま、いったいどっちなんですか、痛いのか苦しいのか分からないのですか」

琴 「うーっ（頷く）」

清七 「間違えると大変なことになるんですよ。では、私が責任を持つて（と、薬を宙に放ると眼をつぶって一つを握り取る——何とも無責任）はい、こっち！こちらにしましょう。（薬紙を開き）じきですよ、じき治りますよ。（と、竹筒を手に取る）あれ？ 水がない。仕方ありません、では、私が噛み砕いて（薬を口の中に放り込む）緊急の時ですからね、口移ししても我慢してくださいよ。……。さあ、お嬢さま、やりましょう！（と、琴に唇を近づけ）……。恐がらなくてもいいですよ、すぐ済みますから、舌なんか入れませんから、ほらお嬢さま（口の中の薬が、どろどろと粘り着く）ん、ありや、何だこりや、あつ、こりや駄目だ、ねばねばしちゃって『落語家の圓生風に』だから、葉なんてものは噛んじやいけねえなんて……。呑んじやつた！（異様な顔、そして急に便意を催す）あつーあつ、お嬢さま、ちよつと失礼。あーっ。この下に川がありますから、水汲んでまいります。その前に、あーっ」

清七、紙を揉み尻をおさえて消えて行く。

琴、苦しきのあまり倒れ込む。

真赤な夕陽が琴を照射する。

そして……。日が落ちる。

## 5 闇。

深い闇のなかに、琴の声。

琴のお腹の痛みは癒えているようだ。

琴の声『……。清七……。清七。どこへいつちゃつたの、清七、清七……。誰、誰なの……。清七かい、清七……。？ あつ、誰なの、誰……。あつ、おやめ下さい。あつ、あーっ、助けてー！』

## 6 腹ぼて。

暗闇の中に浮かぶ、琴。

その琴のお腹が、徐々に膨れてゆく。

女中の絹が、拭き掃除、お運び等をしながら、琴の軀の異様さに気づいてゆく。

——この場面は、琴のお腹が七月を迎えるまでを、絹、又は闇の背景を利用して、時の流れ（季節）を描いて行く。

突如、千代の泣き喚く声。

× × ×

あたり、一変して加賀屋の居間。

七月腹の琴、千代、登与、清七がいる。  
清七は申し訳なきように部屋の片隅で身を小さく  
している。

泣き崩れる、千代。

千代「……なんてことを、どうして今まで黙っていたんだい、こんなになるまで。思い起こせば、一つ一つが……お芝居見物の帰り道、大橋の袂でひどい戻しよう、茶店で呑んだ甘酒か、それとも、人の波に酔ったのかとばかり」

登与「気が付かなかった」

絹「深く意味ありげに」おらあ、知ってた」

千代「この月初からやに食欲が出て、嫌いだった煮染めや鱧子に沢庵まで、ばくばく、ばりばり、ばくばく、ばりばり。ああ、何故、気がつかなかったのか」

絹「深く意味ありげに」おらあ、知ってた」

千代「ああ、親として……」

絹「深く意味ありげに」情けねえ」

千代「お腹が出てきたのも、ただ、食べ過ぎのせいかとばかり……」

絹「深く意味ありげに」世間知らず」

登与「……しかし、随分大きくなって、この中に赤子がいるのね、  
山賊の……」

千代「あ——っ」

登与「触ってもいい」

千代「これ!! 清七! お前もどうして黙っていたのだいよ。もう少し早ければ、手の打ちようがあったものを……」

絹「深く意味ありげに」そうだ、重いもの持つとか、高い所から飛び降りるとか、西瓜と天カス食うとか、色々あったものを……もうちつと早ければな」

千代「ああ、長生きはするもんじゃない」

絹「……おらの村に乳母捨て山があったっけ。おかみさん、丁度いい頃になったら、おらが、おぶって捨ててきてやつから、心配すんな」

千代「(慇懃に) 済まないね。(清七に) それに、縁組みも!」

清七「申し訳ありません! みんな、私が悪いんで。お嬢さまのそばを小半時、離れたばかりに」

登与「まあ、小半時で、何て手の早い山賊だ、物を取るのが山賊だろくに、子種を置いて行きやがった」

千代「あ——っ!」

清七「……しかし、出来ちまったものは、又、何年かたちや、大旦那様の泥だらけみたいに、お茶を啜りながらの笑い話になりますよ登与に) ねえ」

登与「お前、こんなことが笑い話になりますか。そんなことばかり言っていると、下駄の鼻緒で鼻の穴ふさいじゃうよ」

清七「何かお呪いまじなですか」

登与「呪いなんかじゃないよ、息が出来なくなって、死ぬんだよ」

清七「口、開いてますよ」

登与「お前は、お喋りだからね、息する暇がなくて、死ぬんだよ」

つづく

1986年

イエローページ公演台本より